

『琥珀色のなみだ～子狐の恋～』

著：成瀬かの

ill：yoco

木漏れ陽を反射し、水面がきらきら光る。

鈴だけをつけた素っ裸でせせらぎに踏み込んだ琥珀は、ひゃあと叫んで身を縮めた。足首の周りをハヤの影がすり抜けてゆく。

直垂を脱いだ鐵が手拭いを濡らし、琥珀の軀を洗い始めた。

「くろ……っ、くろ、つめたい……っ」

「我慢してじっとしている。琥珀は神様なのだからな。毎日此处でこうやって身を清めねばならない。明日からは自分ですのだぞ」

薄い胸や細い首を冷たい手拭いでごしごし擦られ、琥珀は縮み上がった。幼な子の時は湯で優しく洗ってくれたのに、えらい違いである

——おおきくなるって、いいことばかりじゃない。

琥珀の軀が成長した日の夜、鐵は新しい筵(むしろ)を床に敷いて言った。もう大きくなったのだから、今夜からは一人で寝なければならぬと。

なんて意地悪な事を言うのだろうと琥珀は憤(いきどお)った。琥珀は鐵の匂いに包まれて寝るのが大好きなのに、これでは眠れない。

実際には寢床に入って十も数えぬうちに寝入ってしまったのだが、鐵の心ない仕打ちに琥珀は傷ついている。

そのうえ今日は水攻めだなんて。

——くろはひどい。

琥珀は涙目で鐵を見上げる。だが鐵の肌を目にした途端、不満などが消えてしまった。

「どうした」

騒ぐのをやめ凝(ぎょう)然(ぜん)と立ち尽くす琥珀を、鐵は作業を続けながら見下ろす。

「く……、くろ、いたい……？」

早くも涙ぐみつつ、琥珀は透き通りそうな程白く小作りな手を、鐵の浅黒く焼けた肌に当てた。

鐵のなめし革のような肌には、無数の傷痕が刻まれている。

己の身を見下ろし、鐵は苦く笑った。

「……しまったな。忘れていた」

琥珀に背を向け、脱ぎ捨ててあった直垂を羽織る。痛々しい傷痕が視界から消え、琥珀は少しほっとした。

「こんなの、どうしたの、くろ」

「昔、ちょっと、な。私が愚かだった故に受けた傷だ」

袖を通しただけの直垂が木々の間を渡る風に煽(あお)られる。引き締まった鐵の体軀は、大人の男、そのもので、手も足も若木のように細く貧弱な琥珀とは比べものにならない程逞(たくま)しい。子供でしかない己に理不尽な苛(いら)立(だ)ちを覚え、琥

珀は俯いた。

くろは、違う。

こはくとまるで違う。

ずっと大きくて強くて、琥珀の知らない色んなものをその身の裡(うち)に隠してる。

鐵が大きな瞳を潤ませている琥珀の頬を、掌で撫でた。

「泣くな、琥珀。おまえが泣くと——」

言い淀む鐵を、琥珀は見上げた。

「こはくが、泣くと？」

鐵が琥珀の前にしゃがみ込む。浅い流れに直垂の裾が落ち、色を変えた。枯れ葉色の髪をさらりとなぞり、鐵はうっすらと、だがひどく柔らかな笑みを浮かべる。

「……琥珀が泣くと、俺の胸まで痛くなる」

琥珀の尻尾が大きく膨らんだ。

——なあと、これ。

なんだかどきどきして、……胸が、痛い。

思わずぎゅっと抱きつくと、鐵は優しく背中を叩いてくれた。

琥珀は目元を拳でごしごし擦り、頼りない声で鐵に宣言する。

「あの、ね。こはく、もう泣かない」

「そうしてくれるとありがたい。——実はこれから俺は祭りの準備の為、月白の屋敷に行く。琥珀は家で留守居をしていて欲しい」

え？

琥珀は目を見開いた。鐵の言う意味が頭に入ってくるにつれ、大きな衝撃に打ちのめされる。

——なに、それ。

「——やっ……」

「厭なのはわかってる。夕暮れまでには必ず戻る。烏(ちょう)子(こ)殿がその間おまえの面倒を見てくれる。おまえの遊び相手も用意してある。家でただ待っていてくれればいいだけだ」

——そんなの、むり。

琥珀の眉尻が情けなく下がった。

琥珀は物心ついた時から片時も鐵の傍を離れた事がない。鐵が傍にいるのが当たり前。その鐵が一時だけでもいなくなってしまうなんて。

想像してみただけでひどく心許ない気分を襲われ、琥珀は鐵にしがみつく腕にぎゅうぎゅうと力を込めた。

「や……やっ、くろ……」

「琥珀はもう大きい。幼な子ではないのだから、留守居くらいできるな？」

「で……できない……」

冷たい水がさらさらと足を撫で、体温を奪ってゆく。

じわじわと涙が湧いてくるが、琥珀は泣かないと宣言したばかりだ。鼻を真っ赤にしながらも涙を堪(こら)えようとしていると、鐵が両の掌で琥珀の頬を包み込んだ。

「つまらなくない祭りを見てみたいのだろう？ 琥珀の為に月白と色々準備をせねばならぬ。一時の事だ、堪えてくれるな？」

こはくの、ため？

「うう……」

そう言われたら我(わ)が儘(まま)を言い続ける訳にもいかない。

でも出掛けていったきり、鐵が二度と帰ってこなかったらどうしよう？

不安で不安で、琥珀の耳はぺそりと倒れてしまう。

清めを終えた琥珀が鐵に手を引かれとぼとぼとあばら屋に戻ると、家の前で鳥子と二人の子供が待っていた。

「もう来ていたか。待たせてすまぬ」

「いいえ、とんでもないですよ。いつも狐神様のお世話をさせていただいているんですし」

鐵は引き戸を開け、鳥子たちを家に通した。琥珀はぎゅっと鐵の袖を握りしめ、俯く。

「琥珀、会った事があるだろう？ 鳥子殿に、小(こ)太(た)郎(ろう)に、桃(もも)葉(は)だ。私が留守の間、鳥子殿の言う事をよく聞くんだぞ」

「……うう」

鐵はよく熟れた桃を一つ、琥珀に渡した。桃は初めて口にした時から琥珀の大好物だ。

涙目のまま一口嚙ると、甘い露が口の中に広がる。

——おいしい。

だが、哀しい気持ちは変わらない。

「それでは鳥子殿、よろしく頼む」

鐵が頭を下げると、少し年上らしい鳥子は大きく頷いた。

「はいよ。頑張ってきておくれな」

「おまえたちも琥珀と仲良くしてやってくれ」

「はい！」

琥珀は二人の子供にも桃を握らせ挨拶を終える。

だが鐵が出掛けようとする、琥珀が勢いよく立ち上がり土間に駆け下りた。鐵の腰にぎゅーっとしがみつく。

「琥珀……。ほんの一時留守にするだけだ。すぐ戻ってくる」

まるでこれが今(こん)生(じょう)の別れであるかのような悲(ひ)愴(そう)な様子に、鐵は苦笑した。

全身で行って欲しくないと訴える琥珀の頭をもう一度撫で、鳥ガラのように細い軀をそっと押しやる。野良仕事に鍛えられた鳥子の腕が琥珀を受け取った。

「そうだよ。鐵様はちゃんと帰ってくるよ。のろのろしていたら皆がさっさと狐神様の所へ帰れーって追い立ててくれるさ」

琥珀は頬を膨らませた。

それくらい琥珀にだってちゃんとわかっている。鐵は琥珀に嘘をつかない。

だが鐵が遠ざかってゆくにつれ、身の裡を満たしていたあたたかいものが消えてゆくような心持ちがして、琥珀は淋しくてならなかった。

鐵の背中が見えなくなると、鳥子がしゃくり上げる琥珀の髪をくしゃくしゃと掻き回す。鳥子の手つきは鐵と違って乱暴だ。

「や……っ」

「いつまでもべそべそしているなんて、赤子みたいですよ、狐神様。もう大きくなられたのだから、しゃんとなさらなきゃあ。狐神様がいつもひっついていたら、鐵様だって困

っちゃいますよう」
「そんなこと、ないもん……」
琥珀は涙目で唇を尖らせた。

本文 p105～112 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>